

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2015年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2015.6

第53号

正 論

親鸞仏教センター研究員 藤 原 智

毎日の生活のなかで、さまざまな言葉が自然と耳に入ってくる。それぞれの人が、それぞれの立場で真剣に物事を考え、正しいと思うところを述べているのだろう。そのこと自体には、敬意を払いたい。ただ、そうして語られるいわゆる正論が、ややもすると他者を批判するために語られていると感じることが少なくない。それは私だけであろうか。

もちろん、正論大いに結構である。そしてさまざまな場面で、議論が尽くされていくことは大事なことである。しかし、その正論が他者を断罪するために語られるとき、威勢よく正論を語るその人がまるで他者を裁くことでしか自分を保つことができないかのように見えてしまう。そういうことがある。言葉の正しさに翻弄^{ほんろう}され、自分を見失ってはいないだろうか。自分は正しい、あの人たちは間違っている、誰かに脅迫でもされて、そう主張せずにはおれないかのように。もしそうであれば、それは一体なぜであろうか。一旦立ち止まって、じっくりと自分を省みる時間が必要なのではなかろうか。

とはいえ、ものすごいスピードで動き続ける現代である。悠長に立ち止まっている余裕なんてないのかもしれない。そんなことを言えるのは暇人だからだと。しかし、だからこそあえて言う意味もあるであろう。

そんなとき、今さらながらに考えさせられたのが、有名な『歎異抄』の次の一節である。

まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひとも、よしあしということのみもうしあえり。

（『真宗聖典』640頁、東本願寺出版部）

歴史の審判を潜^{くぐ}って私の前に現れたこの遺訓は、すでに一個人の述懐を超えた静寂の響きがある。それは私の小賢^{こけん}しい考えなど頑^{がん}として拒否をして、私の前に立ちはだかる。古来、どれほどの人がこの言葉の前に立ち尽くしてきたであろうか。しかし、この言葉から目を背けることもできなかったのである。なぜなら、まことに私がそこにいたからである。

善し悪しでものを見ることしかしていない。それが当然だと思っている。その人間の姿を在るべからざるものとして、古賢は歎きを表している。そしてその言葉の根元に、より深い悲しみの眼があることを知らない。知らないというかたちでしか遇^あうことができない。それは人も、私も同じなのだ。それこそ人間のまことなのだと。

その慚愧^{ざんき}を私も人も抱えている。いつでもその慚愧の場に立ち返って、物事を考え、言葉を紡いでいければと思う。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③②

宗教的な光明

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第79回と80回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第79回では「七宝樹」について、第80回では「道場樹」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第77回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 本当のいのち

本願の第十二願、第十三願が「光明無量の願」、「寿命無量の願」と言われていますが、無量寿仏と無量光仏とは一体なのです。本当は別の願ではなくて、無量寿仏と無量光仏とは、大きなはたらきの二面を取り出した言葉だと言ってもよいわけです。光となつてはたらき、^{いのち}寿となつてはたらく。

寿となつてはたらくとはどういうことか、難しいことですが、本当のいのちを与えるというような意味で考えたらよいのだと思うのです。普通のわれわれの生命は因縁で生まれ、因縁で滅んでいく、^{しよしよ}因縁所生の命ですが、その因縁所生の命を生きているなかに、命それ自身とは何であるか、何のためにここに今の命が与えられてあるかという問いをもつときに、それはこの世の命の成り立ちを問題にしているのではなくるわけです。この世の普通の問いは、生まれたうえで、どうしたらよいかというものです。どうやって稼ごうとか、今日は何を食べようとか。そういう生まれているうえでのいろいろなことではなくて、生まれるということが一体何なのだと。これは答えがないと言ってもよいわけです。答えがないような問いをもつ。人間の闇、人間の苦悩が、何でこんな自分がここに生きていなければならないのだろうという問いになる。

そういう問いに対して、本当に明るみが与えら

れ、本当に感謝しながら生きていける智慧が与えられる。それをいのちが与えられると表現するならば、無量寿仏の寿は本当のいのちを与えるのだと。本当のいのちと言うと、何か別の命がくるみたいなイメージですが、そういう意味ではない。今生きている命が暗い、闇のような命だとするならば、それが明るくなった。「ああ、明るいな」と喜んで生きていける智慧が与えられたときのいのちです。別の命になるわけではないけれども、新しいいのちが感じられる。このいのちは、いわゆる因縁で生まれ、因縁で滅ぶ命とは違う質のものです。

■ 悪業因縁を選ばず

この世の因縁は、友だちができたり、夫婦になったりいろんな因縁がありますけれど、出会う因縁があつて出会うわけです。ところが阿弥陀如来は因縁を選ばない。どういう苦悩の状況であろうと、どういう悪業因縁に苦しむ場合であっても、それを選ばない。あらゆる衆生を救い遂げたいと。

これはだんだん触れてくるととてもありがたいのですが、初めのうちはどういうわけか因縁が薄く感じるのです。宿業因縁が近いとありがたいということがあつて、例えば、病気をしていたときは薬師如来がありがたいとか、子どもさんを亡くした場合は地藏さんがありがたいとか、何か因縁が近いとありがたいわけです。ところが、阿弥陀如来は何がよいのか、何だかわけがわからない。別に病気に効く薬をくれるわけでもないですし、なぜありがたいのか。どんな苦悩であっても明るくしなければやまないということは、情況的苦悩を除く光ではないのです。ですから、出会う初めは、あまりありがたくないというか、あつてもなくても同じじゃないの、という感じを受けるのです。それがじわっと効いてくる。譬喩的に言えば、空気のようなありがたさと言うか、空気がないなどということは考えられない。あるからこ

そ生きていられる。そういう気づきが起こつてくると、どれだけ深い闇に苦しもうと、それを思い起こすと阿弥陀の光が射してくる。そういう意味で阿弥陀の光は、無量光、限りがない。限りがあったならば自分は覚りを開かない、つまり仏に成らないと誓っているのですから、限りはないのだと。

「もし三塗・勤苦の処にありてこの光明を見たとてまづれば、みな休息することを得て、また苦悩なけん」（『真宗聖典』30～31頁、東本願寺出版部）。阿弥陀如来の光は、三塗、地獄・餓鬼・畜生のような苦悩の深い場所、悪業因縁でたすからない場所のところにあっても、この光明を見ることができる。そういう場所にあつてこの光明を見れば、みんな心が安まると。

■闇へ闇へ

阿弥陀の光がわれわれの苦悩の闇を本当に明るくするということは、なかなか体験的には、よくわからないのです。曾我量深先生は、われわれにとって闇が晴れるということは、法蔵菩薩と出遇うことだと教えてくださった。つまり、法蔵菩薩は一切衆生を救わずんばやまんと誓って、どのような苦悩の闇をも厭わない。苦悩の衆生となって、どんな苦悩も引き受けて歩もう、そういう願心ですから、自分が感じているつらさとか苦悩はこの願心のむしろエネルギーになるのだと。だから曾我先生は、凡夫は明るみを求めるけれど、法蔵菩薩はむしろ闇へ闇へなのだ。闇こそ我がはたらく場所だと言ってそこへ入ってくださる。そういう場所をわれわれは生きていたと思ったらかたじけないではないかと。私個人では嫌でしかたがない。けれども法蔵菩薩がはたらいてくださる場所なのだ。このように意味転換が起こるわけです。法蔵菩薩のお心は私のこの苦悩を晴らさんがためなのだ、法蔵菩薩を身近に感ずると、自分独りで苦悩を背負っていると思って、逃げたい逃げたいと思って逃げられなくて、つらくてたまらなかった命の見方が変えられるということが起こるのです。そうすると、嫌だなどと思っていたのはもったいない根性だ。こういう命があつてこそ生きている意味があるではないかと、そういう眼の転換をもたらすわけです。それが宗教的な光明、光という意味を持つのです。

われわれは物質的光明を求める。苦悩はなくなって明るくしてほしいと思う。でも、なくなってほしいと思えば思うほど闇は深い。われわれが光を求めても光などももらえない。けれど、闇を生

きてくださるものがあると教えられると、南無阿弥陀仏と共に明るみがくるのです。

（文責：親鸞仏教センター）

親鸞仏教センターの動き

（2015年2月～2015年4月）一抄出—

■ 2015年

- 2/4 第151回清沢満之研究会
- 2/6 第10回研究員と読む公開輪読会「浄土教に求められた救い—『観無量寿経』を読む—」担当：中村玲太研究員①2/6②2/13③2/20④2/27（文京区・東京大学仏教青年会会館）
- 2/10 第79回（通算第130回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 2/13 ご命日のつどい
- 2/16 第171回英訳『教行信証』研究会
- 2/17 第22回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 2/25 第9回『西方指南抄』研究会
- 3/4 第172回英訳『教行信証』研究会
- 3/6 第173回英訳『教行信証』研究会「阿修羅の夢と大行—親鸞と大拙の理解をめぐる—」大谷大学専任講師：マイケル・コンウェイ氏（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/9 第80回（通算第131回）連続講座「親鸞思想の解明」（千代田区・東京国際フォーラム）
- 3/12 第5回センター会議（親鸞仏教センター）
- 3/13 ご命日のつどい
第23回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 3/16 第1回清沢満之研究交流会（清沢満之研究の〈可能性〉—没後百周年から見えたもの—）「清沢満之の「復権」の試み」東京医療保健大学非常勤講師：山本伸裕氏、「天皇制国家と「精神主義」—清沢満之を中心に—」本願寺史料研究所研究員：近藤俊太郎氏、「清沢満之の〈発掘〉—『臘扇記』という一断面—」名和達宣研究員、「大谷大学編『清沢満之全集』（岩波書店）編纂の背景と課題」大谷大学短期大学部専任講師：西本祐攝氏、全体討議「異領域からの清沢研究が交わる場所」愛媛大学准教授：杉本耕一氏、田村晃徳囑託研究員〈司会〉（文京区・求道会館）
- 3/30 第10回『西方指南抄』研究会
- 3/31 第152回清沢満之研究会
- 4/1 人事発令（田村晃徳、大谷一郎、大澤絢子が囑託研究員として再任）
- 4/6 第24回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 4/7 第49回現代と親鸞の研究会「終末期ケアにおける宗教の役割—死にゆく人はさびしいか—」社会学者：上野千鶴子氏（文京区・東京ガーデンバレス）
- 4/10 ご命日のつどい
- 4/14 第12回「親鸞仏教センターのつどい」記念講演「自己組織する地球の〈いのち〉—人間の死生観を越えて—」NPO法人「場の研究所」所長：清水博氏、「共に大悲の「場」を生きる」親鸞仏教センター所長：本多弘之（千代田区・学士会館）
- 4/22 第153回清沢満之研究会
- 4/27 第11回『西方指南抄』研究会
- 4/28 第174回英訳『教行信証』研究会

掲載論文

- 4月 『場所』第14号（西田哲学研究会）
名和研究員「西田幾多郎と浩浩洞—「宗教論」の成立背景—」

「罪深き人間」と 「障りなき念仏」

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳

英訳『教行信証』研究会は親鸞仏教センター設立当初から続いている。鈴木大拙により英訳された『教行信証』を読むということは、大拙の浄土教理解を知るのみならず、親鸞の思想をいかに現代に、そして世界に伝えていけるかを問うことでもある。今回は、最近の研究会で議論された特徴的な英訳や、外部の先生をお招きしての研究会について報告する。



前回、本研究会について報告したのは2012年のことである（『親鸞仏教センター通信第40号』参照）。その報告以降で特記すべき出来事があったので、まずはそれから報告しなければならない。それは英訳『教行信証』の再版である。長らく絶版状態にあったが、親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として再版が決まったのである。特に、今回の再版においては表紙に“Edited by The Center for Shin Buddhist Studies”と明記してあるように、親鸞仏教センターが編集している。東京大学名誉教授であり公益財団法人中村元東方研究所理事長の前田専學先生を中心に編集が行われた。詳細は『現代と親鸞』第24号に詳しいので、そちらを参照していただきたい。

それでは大拙の特徴的な訳文を見ていこう。いくつかにその特徴は分類することができる。その一つに文意をはっきりさせ、その文章がもっている思想的意味を明確にすることが挙げられる。前回の報告では念仏について確認したのだが、今回は人間と法について述べてみたい。現在は聖道諸師の文章を主に読んでいたので、そこからの引文である。たとえば「^{とう}借間、^{こんじよう}今生の罪障多し、いかなぞ浄土にあえて相容らんや。^{あい い}報えて^{こた}道わく、^い名



平生の研究会の様子

を称すれば罪消滅す。たとえば^{みようと}明燈の闇中^{あんちゆう}に入るがごとし」（『真宗聖典』181頁、東本願寺出版部）を大拙は次のように訳す。

When we are such sinners as we are in our present life,

How can we be in accord with the Pure Land?

I say: when the Name is pronounced, sins are effaced,

As a bright lamp is brought into the darkness.

これをセンターでは「現世において、これほど罪深い私たちが、どうして浄土にふさわしい身となることができるのか。名が称えられたならば、罪は拭い去られる。ちょうど、灯火の明かりが暗闇に差し込むように」と訳した。この英訳の特徴は西本願寺が出版した“Collected Works of Shinran”（以下CWSと略称）を参照すると明らかになる。

Question: Countless are the acts of karmic evil in this life that obstruct you;

How can one such as you enter there?

Answer: When we say the Name, our karmic evil is eradicated;

It is like a shining lamp entering the dark.

（傍線筆者）

下線部が「今生の罪障多し」に該当する。大拙の“When we are such sinners as we are in our present life”と対比するとその違いがわかる。大拙が「現世において、これほど罪深い私たちが」とあるように「罪障多し」を人間の存在に充てている。一方でCWSは“Countless”とあるように

「いかに罪障が多いか」という「罪障の数」に焦点を当てている。このように、大拙は人間がいかに罪障深き存在であるのか、そしてその人間の罪も仏の名にとっては障りとならないことを述べているのである。

同様に次の文章も確認してみよう。「また云わく、いわんや我が弥陀は名をもつて物を接したまう。ここをもつて耳に聞き口に誦するに、無辺の聖徳、識心に攬入す。永く仏種となりて、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を獲証す。信に知りぬ、小善根にあらず、これ多功德なり」(『真宗聖典』186頁)という文がある。この「信に知りぬ、少善根にあらず、これ多功德なり」を大拙は次のように訳す。

I truly know that [such a wonderful thing] can never happen to those who are deficient in the stock of good merit. It is all due to the *nembutsu*, which is full of merit.

これをセンターでは「このような素晴らしいことは、よい功德の蓄えが不足している人々には、決して起こり得ないことを、心の底から知った。それは全て功德が満ちている念仏によるのである」と訳した。この英訳では少善根を「人々」に、多功德を「念仏」に配して訳している。この訳に対して、CWSは次のように訳していた。

I know truly that the Name possesses not scant roots of good, but inexhaustible roots of good.

この文章を見ればすぐにわかるように「少善根多功德」共に阿弥陀の名号について述べており、その点で大拙と大きく異なる。『教行信証』原文を見ると、何らの説明もされていないのだが、大拙はこのように訳すことによって、人間と念仏との関係を示しているのだろう。つまり善根少なき人間であっても、念仏＝法は必ず摂取するということを表しているのだ。

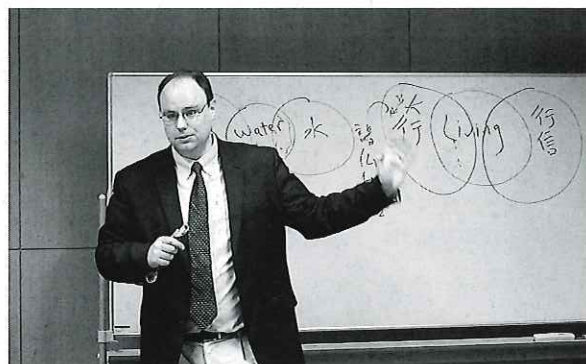
これらはほんの一例であるが、大拙訳に独特の視点が見られることは間違いない。それらの訳文は『教行信証』の直訳ではなく、大拙の一つの解釈となっているのである。つまり、英訳『教行信証』を読解することは大拙における親鸞思想の理

解を学ぶことなのである。

また、外部から講師を招聘しての研究会も行った。2015年3月6日に大谷大学非常勤講師(当時)であったマイケル・コンウェイ氏をお呼びして講義をいただいた。当日は「阿弥陀の琴と大行一親鸞と大拙の理解をめぐって」とのテーマのもと、大拙の「大行」理解について講義が行われた。氏は“Great Living”という大行理解の背景や、「不可思议」「自然」と大行との関連について述べられた。詳細は『現代と親鸞』に掲載予定であるが、氏の熱心な講義に応答するように、活発な質疑がなされたことも最後に付言しておきたい。

(文責：親鸞仏教センター)

※マイケル・コンウェイ氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第32号(2016年3月1日号)に掲載予定です。



マイケル・コンウェイ氏

■マイケル・コンウェイ (Michael Conway) 氏

大谷大学文学部専任講師

1976年米国シカゴ市生まれ。1997年米国イリノイ州ノースウェスタン大学卒業。2003年大谷大学大学院修士課程真宗学専攻入学。2009～2011年大谷大学助教。2011年より同大学非常勤講師。2011年大谷大学大学院にて博士号修得。2011～2015年東方仏教徒教会編集者。現在、大谷大学文学部専任講師。専門は真宗学。

著書に『信の源泉を尋ねて—真の価値観を求める歩み—』(2015年・響流ブックレット・kindle版)。翻訳書に『生きる力を求めて Give Me the Power to Live—中村久子の世界』(2011年・東本願寺出版部)。

2011年12月13日に「英訳『教行信証』研究会」にご出講いただき、「如実修行相應」としての大行—鈴木大拙訳『教行信証』「行巻」管見—をテーマにご講義いただいた。その詳細は『現代と親鸞』第24号に収録されている。

第1回「清沢満之研究交流会」報告

清沢満之研究の〈可能性〉 — 没後百周年から見たもの —

● ● ●

清沢満之研究は2003年の没後百周年を機に大いに発展し、その波紋は宗門内にとどまらず、多種多様な方面に広がっている。2015年3月16日、さらなる研究の可能性を拓くべく、当センターの主催により、「浩々洞発祥之地」として知られる求道会館（文京区本郷）を会場に、第1回「清沢満之研究交流会」を開催した。当日は約60名が集い、研究領域や立場を越えての白熱した議論が繰り広げられた。以下、研究発表（4名）の要旨と全体討議でのコメントの一端を報告する。

（研究員 名和達宣）

研究発表

I 清沢満之「復権」の試み

山本 伸裕（東京医療保健大学非常勤講師）

清沢は、洋の東西を問わず「宗教」と呼ばれうる思想に内在する論理構造を、客観的（学問的）に明らかにする取り組みに、日本人としていち早く着手し、そ



うした仕事を体系的に成し遂げた先駆者である。宗教哲学者としての清沢の仕事は、これまでも二度（第一次：昭和40年代、第二次：2000年以降）にわたって「復権」が試みられてきたが、いずれも失敗に終わったと言わざるをえない。今後、第三次の「復権」が試みられるとすれば、「精神主義」と呼ばれてきた思想に紛れ込んだ第三者の思想要素を慎重に見分けたうえで、それらを可能な限り排除し、これまであまり手がつけられてこなかった「宗教哲学」の論考を基盤に、生涯を貫く思想の全体像に迫っていく必要があるであろう。



浩々洞発祥之地碑（求道会館前）

天皇制国家と「精神主義」

II — 清沢満之を中心に —

近藤 俊太郎（本願寺史料研究所研究員）

従来の清沢研究には、信仰の歴史性を捨象する傾向があった。それゆえ「信仰とその歴史的立場の総体的把握」という観点から清沢の「精神主義」について考



察する必要があると考える。清沢は、世俗権力への従属を第一義とせず、現実を鋭く相対化していくことで信仰の確立に向かっていく。そうした現実の相対化の徹底は、宗教の絶対性を開示するうえで重要な意味をもっていた。ただし清沢は、信仰の確立によってその絶対性が現実に変化され、現実に不足を感じなくなるのだとも説いている。清沢の門下が、社会問題や戦争に直面したとき、それを全面肯定して天皇制国家支配を支えたのは、「精神主義」の構造に起因する問題であったと考える。

清沢満之の〈発掘〉

III — 『臘扇記』という一断面 —

名和 達宣（親鸞仏教センター研究員）

『臘扇記』は、晩年に展開された「精神主義」の直前に著された日記兼思索ノートである。没後百周年を経て『臘扇記 注釈』（法藏館）および『影印本 臘扇記』（清沢満之記念館）が公刊されたことにより、「骨格」として伝わってきた清沢の言葉（抄録「絶対他力の大道」）に、一人ひとりの読者のとこ



ろで思想的・歴史的な「肉付け」を施すことが可能となり、同時にこれまでは埋もれていた地底部分の発掘ができるようになった。そこにおいて見いだされた断面や、近年発表された新たな視座からの問題提起をとおして、われわれが「清沢満之」あるいは「精神主義」と呼んできたものは何かを問い、さらにはそれにかかわる自己自身の宗教性をも掘り起こしていきたい。

IV 大谷大学編『清沢満之全集』(岩波書店) 編纂の背景と課題

西本 祐攝 (大谷大学短期大学部専任講師)

一人の人物の思想を尋ねるうえで、その人物の現存する全著述を踏まえ研究がなされるべきであることは言を待たない。その際、テキスト問題は重要である。



没後百周年を機に大谷大学真宗総合研究所の編纂により、新版『清沢満之全集』(岩波書店)が刊行された。編纂・刊行に携わった一人として、その背景と共有すべき情報——新たに収録した文献や自筆稿に基づく^{ほんこく}翻刻により明らかとなった情報、未収録文献の情報——を今後の研究に資するものとして提供する。この全集によって清沢研究上の諸問題が再検討されねばならないが、刊行後十二年、いまだ十分な検討がなされているとは言い難い^〇と考える。今後、研究の進展につれて未収録文献の情報共有も求められよう。大谷大学では、未収録文献の収集・翻刻作業を再開している。

全体討議

異領域からの清沢研究が交わる場所

コメンテーター 杉本 耕一 (愛媛大学准教授)

このたびの研究交流会では「歴史学・思想史学」「真宗教学」「哲学・倫理学」という三つの異なった領域での議論が試みられる点に意義があると理解する。異領



域からの清沢研究がどこで交わることができるのか、あるいはできないのか。そのことが議論できることを期待し、以下の二点を問題提起したい。

- (1) 自身の清沢研究はどのような領域においてなされており、他領域に対してどのような特徴をもっているのか(棲み分け)。他領域との対話のために、自身の領域を越境してゆくとすれば、何が必要と考えられるか(脱領域)。
- (2) 自身が清沢研究(批判も含む)をとおして直接的・間接的に打ち出そうとしている「あるべき仏教」の姿とはどのようなものか。他の提題者のものと共存可能か。



全体討議では、田村晃徳当センター嘱託研究員の進行のもと、初めに杉本氏の投げかけた問題提起に基づき、発表者間で異領域の立場と問題意識から清沢研究に取り組む場合の「棲み分け」と「脱領域」の可能性について意見が交わされた。その後、没後百周年を機に大きく展開したテキストの問題をめぐり、会場からの声も聞き取りつつ積極的な議論が繰り広げられた。

近代に打ち出された清沢の思想が、現代に影響を与えうるかいなか。また、そこから新たな表現が生じうるか。当センターでは、今後も継続して検証と練磨と醸成の場を提供できるよう取り組んでいく。

(文責：親鸞仏教センター)

※研究発表・全体討議の詳細は、『現代と親鸞』特別号として編纂中の『清沢満之論集(仮)』(2016年6月1日発行予定)に掲載予定です。



全体討議の様子

だと言われます。「応時」とは、信じる心が起る、まさにそのとき、その瞬間に阿弥陀の願いが成就する、ということ、で、「為現身」とは、阿弥陀の誓いを信じる人のために「仏」が現れる、ということです。「是故我帰命」とは、このように龍樹菩薩が、ただただ阿弥陀如来の呼びかけを信じ、いつ、どのようなときであつてもそれにしたがわずにはいられないのだ、とおっしゃっているのです。

原文

『十住毘婆沙論』に曰く、「人能念是仏 無量力功德 即時入必定 是故我常念 若人願作仏 心念阿弥陀 応時為現身 是故我帰命」文

「人能念是仏 無量力功德」というのは、ひとよくこの仏の無量の功德を念ずべしとなり。「即時入必定」というのは、信ずれば、すなわちのとき必定にいたりとなり。必定にいたりというは、まことに念ずれば、かならず正定聚のくらしいにさだまるとなり。「是故我常念」というのは、われつねに念ずるなり。「若人願作仏」というのは、もし人、仏にならんと願せば、「心念阿弥陀」という。心に阿弥陀を念ずべしとなり。念ずれば、「応時為現身」とのたまえり。応時というは、ときになうというなり。為現身ともうすは、信者のために如来のあらわれたまうなり。「是故我帰命」というのは、龍樹菩薩のつねに阿弥陀如来を帰命したてまつるとなり。

（『真宗聖典』五一七頁）

【参考】

（ページはすべて『真宗聖典』）

◆能／よく……べし

■しかれば名を称するに、能く衆生の一切の無明を破し、能く衆生の一切の志願を満てたまう。称名はすなわちこれ最勝真妙の正業なり。

（二六一頁『教行信証』『行巻』）

■念弥陀仏ともうすは、尊号を称念するとなり。「能念皆見 化仏菩薩」ともうすは、能念はよく名号を念ずとなり。よく念ずともうすは、ふかく信するなり。

（五一六頁『源空銘文』）

◆仏の無量の功德を念ず

■諸仏はみな、徳を名に施す。名を称するは、すなわち徳を称するなり。徳、よ

『アンジャリ』第29号刊行 (2015年6月1日)

- 吉村萬壺「肺気腫と『ボラード病』」
 - 白井 聡「回帰する占領期」
 - 野矢茂樹「こんな時代だからこそ、「哲学的な考え方」が求められている」
 - 赤坂憲雄「いのちの思想を紡ぎなおすために」
 - 福島和人「「個からの解放」としての「自利利他」の道」
 - 堀川恵子「教誨師から教わった「生」の重み」
 - 大田 堯「かすかな光を求めて」
 - 橘ジュン「一〇代二〇代の女の子たちが、等身大の自分のまま相談に来れる場所」
 - 関川夏央「『舞姫』は明治人 鷗外の「始末書」」
 - 本多弘之「欲生心の象徴的自覚（7）」
 - 大澤絢子「見るということ」
- 敬称略。お求めは当センターまで。



『現代と親鸞』第30号刊行 (2015年6月1日)

- 研究論文「法然門流における弥陀法身/報身説の検討—弥陀は三世を貫く如来か—」中村玲太／「穢土の往生（四）」越部良一
 - 現代と親鸞の研究会「親鸞と日本主義」中島岳志
 - 『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会「中世からいまを照らす—親鸞思想の現代的意義」佐藤弘夫
 - 第11回親鸞仏教センター研究交流サロン「生きづらさから考える—「物語」の可能性—」発題：清水真砂子・コメンテーター：青木省三
 - 第11回親鸞仏教センターのつどい「大介護時代を生きるということ」平川克美／「末法の新現象と自足性の自覚」本多弘之
 - 連続講座「親鸞思想の解明」
「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—（17）」本多弘之
 - 『現代と親鸞』総目次（創刊号～第29号）
- 敬称略。お求めは当センターまで。



「龍樹菩薩の銘文」

親鸞によって提示される龍樹の言葉は、「念すること」について語る。

第一句「人能念是仏」は普通、その後の「即時入必定」と対応して、「よくすれば……」と条件節として読まれるものだ。しかし親鸞はこれを、一つの呼びかけの言葉として切り出してくる。後半の「心念阿弥陀」についても同じだ。「この仏の無量の功德を念すべし」、「心に阿弥陀を念すべし」。つまり「念」とは第一に、われわれ自身が「念ずる」ことではなく、「念ぜよ」との呼び声である。龍樹の「念」には、阿弥陀の声が響いている。

けれど現代の私たちにとって、個人の声はあくまで個人の声としてしか聞えない。言葉の奥にある、その人をしてそう言わしめるものを見ることができない。国内外から飛びこんでくる痛ましい事件と、異質なものを排除していこうと勇むこの国の空気。現代は、誰もが自分の身を守ろうと必死で、他人の声を聞いている余裕がない。しかし、お互いへの通路を失った先に、私たちが共に歩んでいく道はあるのだろうか。

(元研究員 内記洗)

現代語

「人能念是仏 無量力功德」とは、どのような人であっても、この「仏」のはかりしれない「功德」を念じなさい、ということです。「即時入必定」とは、如来からのこの声を聞きとり、深く信じることができるなら、今、この場所において、そのまま「必定に入る」、ということです。「必定に入る」とは、阿弥陀の真実の呼びかけにしたがって念じるならば、その大きなはたらきのなかに、必ず仏になると確かに定まるのだ、ということです。「是故我常念」とは、私（龍樹）はいつも念じているのだ、ということです。

「若人願作仏」とは、私たちがもし、この世界に深く苦悩し「仏のさとる」を成就したいと願うのであれば、「心念阿弥陀」、つまり心に「阿弥陀如来」を念じなさい、ということです。阿弥陀を念ずるなら、「応時為現身」なの

く罪を滅し福を生ず。名もまたかくのごとし。もし仏名を信すれば、よく善を生じ悪を滅すること、決定して疑いなし。称名往生、これ何の惑いあらんや」と。(二八八頁「行巻」『大経義疏』)

◆すなわちのとき必定に在る

かならず正定聚のくらに在るまゝ
 ■「必得往生」と言うは、不退の位に至ることを獲ることを彰すなり。『經』(大経)には「即得」と言い、『釈』(易行品)には「必定」と云えり。「即」の言は、願力を聞くに由つて、報土の真因決定する時刻の極促を光聞せるなり。「必」の言は、審(あきらかなり)なり、然なり、分極なり、金剛心成就の貌なり。(二七八頁「行巻」)

◆仏にならんと願せば……心に弥陀を念すべし

■「是心作仏」は、言うところは、心よく作仏するなり。「是心是仏」は、心の外に仏ましますとなり。譬えば、火、木より出でて、火、木を離るることを得ざるなり。木を離れざるをもつてのゆえに、すなわちよく木を焼く。木、火のために焼かれて、木すなわち火となるがごときなり。(二四二頁「信巻」『論註』)

◆ときになかう

■如来、無蓋の大悲をもつて三界を矜哀したまう。世に出興する所以は、道教を光聞して、群萌を拯い、恵むに真実の利をもつてせんと欲してなり。無量億劫に値いがたく、見たてまつりがたきこと、靈瑞華の時あつて時にいまし出するがご

とし。(二五三頁「教巻」『大経』)

◆信者のために如来のあらわれたまふ

■『涅槃經』に依るに、「仏の言わく、もし人ただよく心を至して、常に念仏三昧を修すれば、十方諸仏恒にこの人を見ぞなわすこと、現に前に在すがごとし。」(二四六頁「信巻」『安樂集』)

■この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。……この報身より、応化等の無量無数の身をあらわして、微塵世界に無碍の智慧光をはなたしめたまうゆえに、尽十方無碍光仏ともうすひかりにて、かたちもましまさず、いろもましまさず。無明のやみをはらい、悪業にさえられず。このゆえに、無碍光ともうすなり。(五五四頁「唯信鈔文意」)

◆つねに阿弥陀如来を帰命したてまつる

■「言南無者」というは、すなわち帰命ともうすみことばなり。帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがいて、めしにかなうともうすことばなり。このゆえに「即是帰命」とのたまえり。「亦是發願回向之義」というは、二尊のめしにしたがうて安樂浄土にうまれんとねがうころなりとのたまえるなり。(五二二頁「善導銘文」)

原文

婆藪般豆菩薩論曰「世尊我一心 歸命 尽十方 無碍光如来 願生安樂 國 我依修多羅 真実功德相 説願偈總持 与仏教相応 親彼世界相 勝 過三界道 究竟如虚空 广大無辺際」(浄土論)と。

また曰わく、「親仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」(浄土論)

「婆藪般豆菩薩論曰」というのは、婆藪般豆は天竺のことばなり。晨旦には天親菩薩ともうす。またいまはいわく、世親菩薩ともうす。旧訳には天親、新訳には世親菩薩ともうす。論曰は、世親菩薩、弥陀の本願を釈しあらわしたまえる御ことを、論というなり。曰は、こころをあらわすことばなり。この論をば「浄土論」という。また「往生論」というなり。

「世尊我一心」というのは、世尊は釈迦如来なり。我ともうすは、世親菩薩のわがみとのたまえるなり。一心というは、教主世尊の御ことのりをふたごころなくうたがいなしとなり。すなわちこれまことの信心なり。

(『真宗聖典』五一七―五一八頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆旧訳には天親、新訳には世親菩薩

◆「無量寿経論」一卷 元魏天竺三蔵菩提留支の訳なり

婆藪般豆菩薩の造なり、婆藪般豆は、これ梵語なり。

旧訳には天親、これはこれ訛れるなり、新訳には世親なり、これを正とす。四六〇頁「入出」門偈)

◆我／わがみ

◆世尊、我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず、伊蘭より梅檀樹を生ずるを見ず。我今始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。「伊蘭子」は、我が身これなり。「梅檀樹」は、すなわちこれ我が心、無根の信なり。「無根」は、我初めて如来を恭敬せんことを知らず、法、僧を信ぜず、これを「無根」と名づく。世尊、我もし如来世尊に遇わすは、当に無量阿僧祇劫において、大地獄に在りて無量の苦を受くべし。我今仏を見たてまつる。これ仏を見るをもつて得るところの功德、衆生の煩惱悪心を破壊せしむ、と。

(二六五頁「教行信証」「信巻」「涅槃經」)

◆「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたける本願のかたじけなさよ」(六四〇頁「歎異抄」)

◆一心／ふたごころなくうたがいなし

／まことの信心

◆「我一心」は、天親菩薩の自誓の詞なり。言うところは、無碍光如来を念じて安樂に生まれんと願ず。心心相續して他想間雜なし。

(二六八頁「行巻」「論註」)

◆しかるに「経」に「聞」と言はるは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし。これを「聞」と言ふなり。「信心」と言はるは、すなわち本願力回向の信心なり。「歡喜」と言はるは、身の悦予の貌を形すなり。「乃至」と言はるは、多少を摂するの言なり。「一念」と言はるは、信心なきがゆえに「一念」と言ふ。これを「一心」と名づく。一心はすなわち清浄報土の真因なり。金剛の真心を獲得すれば、横に五趣・八難の道を超え、必ず現生に十種の益を獲。

(二四〇頁「信巻」)

原文

「歸命尽十方無碍光如来」ともうすは、歸命は南無なり。また歸命ともうすは、如来の勅命にしたがうところなり。尽十方無碍光如来ともうすは、すなわち阿弥陀如来なり。この如来は光明なり。尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり。無碍というは、さわることなしともうすは、衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀如来なり。この如来はすなわち不可思議光仏ともうす。この如来は智慧のかたちなり。十方微塵刹土にみちたまえるなりとしるべしとなり。

(『真宗聖典』五一八頁)

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆歸命／南無

／如来の勅命にしたがうところ

◆「南無」の言は歸命なり。「歸」の言は、至なり。また歸説「よりたのむなり」なり、説の字、悦の音、また歸説「よりかかるなり」なり、説の字は、税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述するなり。

◆「命」の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。ここをもつて、「歸命」は本願招喚の勅命なり。

(二七七頁「教行信証」「行巻」)

◆十方世界をつくして、ことごとくみちたまえる

◆設い我仏を得たらんに、光明よく限量ありて、下百千億那由他の諸仏の国を照らさざるに至らば、正覺を取らじ、と。

(三〇〇頁「真仏土巻」「無量寿経」)

◆この如来、微塵世界にみちみちたまえり。すなわち、一切群生海の心なり。

(五五四頁「唯信鈔文意」)

◆さわることなし

／衆生の煩惱悪業にさえられず

◆この如来は智慧のかたちなり

◆宝海ともうすは、よろずの衆生をきらわす、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり。この一如宝海よりかたちをあらわして、法蔵菩薩となりのたまいて、無碍のちかきをおこしたまうをたねとして、阿弥陀仏と、なりたまうがゆえに、報身如来ともうすなり。

(四九三頁「曇鸞讃」)

これを尽十方無碍光仏となづけてまつれるなり。この如来を、南無不可思議光仏ともうすなり。この如来を方便法身ともうすなり。方便ともうすは、かたちをあらわし、御なをしめて衆生にしらしたまうをもうすなり。すなわち、阿弥陀如来なり。この如来は、光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ、不可思議光仏ともうすなり。この如来、十方微塵世界にみちみちたまえるがゆえに、無碍光仏ともうす。

(五四三頁「念多念文意」)

「天親菩薩の銘文」(一)

天親の本銘文は「論曰」の語で始まる。これは、『無量寿経』銘文が「経言」で始まるのに対応して、重要なことだ。ここで釈尊の言葉(経)は、一人の聞き手自身を表現する言葉としてふたたび語り直される(論)。

「理論」、「議論」、「論文」など、現代で「論」とは、一定の筋道をもった内容や事柄を意味する。この点、「論」は客観的でなくてはならない。けれど天親の「論」は、あくまでこの身にかかわり、この身として語りだされるような真理を「このころ」とする。自分が生きるも死ぬも、まさにそこにしかないという、命懸けの表明だ。そんな表現にはなかなか出遇えない。

(元研究員 内記洸)

現代語

「婆藪般豆菩薩論曰」の「婆藪般豆」(Vasubandhu)とはインドの言葉で、中国では「天親菩薩」と言い、今日ではまた「世親菩薩」とも言われます。旧訳では天親と翻訳され、新訳では世親と翻訳されている方のことです。注「論曰」とは、この世親菩薩が阿弥陀如来の本願を解き明かされたもののこととを「論」と言い、これこそ世親菩薩のお心にほかならない、という意味で「曰」と言うのです。世親菩薩が著されたこの「論」は、『浄土論』とも『往生論』とも呼ばれています。

「世尊我一心」の「世尊」とはお釈迦さまのことです。「我」とは「この私の身に」ということで、お釈迦さまの言葉を世親菩薩がご自身のこととして引き受けておられるのです。「一心」というのは、「阿弥陀の本願を信じなさい」というお釈迦さまの仰せに対して、二心なく疑いなく、そのこと一つに本當にうなずく、ということです。これこそ、本願に誓われている「真実の信心」にほかなりません。

注1 経典の中国語への翻訳に関して、一般に唐の玄奘三蔵(六〇二―六六四)を境に、それ以前の訳を「旧訳」、玄奘以降の訳を「新訳」と呼ぶ。なお、旧訳の代表者である鳩摩羅什(四―五世紀頃)からさらに時代を遡って以前の訳は「古訳」と言われる。

「天親菩薩の銘文」(二)

私たちは「限界」を生きている。可能性にむかつて全力で生きようとするなら、必ず限界にぶつからねばならない。ただそれが、挫折や割り切り切りではなく、「尊さ」に転じることがある。「今ここに生きていること」に論理的な理由はないが、しかしだからこそ、その事実がこの身に確かに受け止められたなら、それは何より尊い。

「尽十方」も「無碍」も、私たち自身の限界をはっきりと知らしめる言葉だ。ただかけ離れているのではなく、私たち一人ひとりの姿を浮き彫りにする光だ。どうにもならないこの身が、しかし確かにそのように生きてあるという事実が、そのままに語られているのである。

(元研究員 内記洸)

現代語

「帰命尽十方無碍光如来」の、「帰命」とは「南無」です。「帰命」とは、如来からの呼びかけにしたがわずにはいられない心が起こる、ということとです。「尽十方無碍光如来」とは「阿弥陀如来」のことと、この如来は「光」です。「尽十方」の「尽」は、尽くす、ということ、ことごとく、ということとです。「十方」に広がるあらゆる世界を尽くして、ことごとく光が満ちている、ということです。「無碍」とは、妨げられることなく、すべてを超えていく、ということとです。妨げられないというのは、心のなから次々とわき起こってくる煩惱にどれだけ苦しめられようと、また、後にも先にもまったく救いがないような現実を生きていようと、そうした私たち自身の「闇」を照らすべく、光がどこまでも行きわたつてくれているのです。「光如来」とは、阿弥陀仏です。この如来をまた、「不可思議光仏」と言うのです。この如来は智慧の「かたち」です。私たちには触れようのない真実が「智慧の光」と表現されて、「十方」の数限りないあらゆる世界に余すところなく満ちているのだと知りなさい、ということです。

注1 東西南北の四方とその間の四方(北東、北西、南東、南西)に、上下の二方を加えて「十方」と呼ぶ。あらゆる世界を表現する言葉。

『アンジャリ』バックナンバーのご紹介

『アンジャリ』は、経済、思想、教育など専門分野で活躍される方々に現代の課題とその苦闘をご執筆いただき、21世紀の確かな時代の方向を探る情報誌です。なお、「アンジャリ」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味します。



第24号

天童荒太氏 作家 他



第25号

岩田健太郎氏 神戸大学
大学院医学研究科教授 他



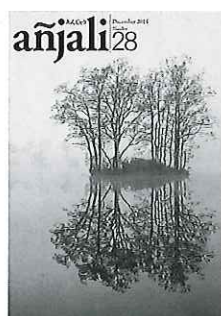
第26号

平田オリザ氏 劇作家、
大阪大学コミュニケーション
デザイン・センター教授 他



第27号

若松英輔氏 批評家 他



第28号

下田正弘氏 東京大学文
学部教授 他

※最新号、第29号については8面下をご参照ください(各500円・送料込み)。

「アンジャリの会」にご入会いただきますと、親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円(送料込)で、『アンジャリ』
(年2回)と機関紙『親鸞仏教センター通信』
(年4回)をご自宅にお届けします。ぜひご入
会ください。知人や友人等のご紹介もお受けし
ます。

■申し込みと問い合わせは、

親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係

TEL 03-3814-4900

FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp まで。

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第3回(浩々洞)

清沢満之を慕い、^{はんもん}煩悶青年たちが寄宿し共同生活を
送った「浩々洞」が1900(明治33)年に誕生する。浩々洞
という名は、手紙を出すのに「清沢方」と書くのでは
何か味気ない、と皆で思案した結果、月見覚了が提案
したものだという。浩々洞誕生の翌年には、雑誌『精神
界』が浩々洞のメンバーを中心として発行されている。

「毎日毎夜に議論が盛んであった」と語られる浩々
洞であるが、浩々洞は清沢のもとに参集した青年たち
の学びの場であっただけではなく、清沢自身の学びの
場でもあった。清沢は門弟たちの勧める本をよく読ん
だ。暁鳥敏ら三人がエマーソンの『論文集』を輪読し
ていると、関心をもった清沢もその輪に入り共に読み
進めたというエピソードも
伝えられる。本を片手にし
た熱い議論が目につく。

本郷森川町(現・求道会
館)に誕生し、東片町、曙
町、巢鴨、小石川へと転々
とした浩々洞であったが、
そこには通底して一人一人
の学びとそこから広がる熱
い議論があつたに違いない。

(中村)



東片町の現在の通り

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日 時: 2015年6月9日(火) 18時30分~21時

7月7日(火) 18時30分~21時

8月3日(月) 18時30分~21時

会 場: 東京国際フォーラム ガラス棟(G棟)

■ご命日のつどい(毎月第2金曜日)

日 時: 2015年6月12日(金) 10時~11時30分

7月10日(金) 10時~11時30分

8月14日(金) 10時~11時30分

会 場: 親鸞仏教センター会議室

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あしがき

私は手帳を開くのが嫌いだ。予定を確認する際に、
この日まで私は生きているだろうかと考えてしまうか
らだ。他にも“人生設計”“生涯学習”といった言葉か
ら死を連想して恐ろしくなる。

普段は死ぬことを考えない。なんとなく、自分は
ずっと生きているつもりでいる。「でも死ぬよ」と教え
てくれるのが、亡くなった祖父の思い出であり、手
帳を開く行為なのだろうと思う。(上条)